

平成五年度

平成 5 年度
鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

湖山第3遺跡群跡跡
秋里坂古墳遺跡
八桂見ヶ鼻
山

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

一九九四

1994

鳥取市教育委員会

鳥取市教育委員会

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

— 湖山第3遺跡 —
秋里遺跡
八坂古墳群
桂見遺跡
山ヶ鼻遺跡

1994

鳥取市教育委員会



序 文

この発掘調査報告書は、平成5年度に国・県の補助金を受けて実施した「鳥取市内遺跡」の発掘調査記録です。

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡があり、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えています。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人の生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき貴重な市民の財産です。このような認識のもと、鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関との協議を重ね、また地元の方々の深いご理解をいただきながら文化財保護行政を進めているところです。

さて、本年度に調査を実施いたしました湖山第3遺跡、秋里遺跡、八坂古墳群、桂見遺跡、山ヶ鼻遺跡の発掘調査事業も地権者の方々を初めとする関係各位のご協力によって無事所期の目的をはたし、大きな成果を得て報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

平成6年3月

鳥取市教育委員会
教育長 田中哲夫

例　　言

1. 本書は、平成5年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 調査を実施した遺跡は、湖山第3遺跡、秋里遺跡、八坂古墳群、桂見遺跡、山ヶ鼻遺跡である。
3. 調査の期間は、平成5年7月1日から平成6年2月28日である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 発掘調査の実施および本書の作成にあたっては多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいたいた。記して感謝いたします。

鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター、(財)鳥取県教育文化財団東部埋蔵文化財調査事務所、(財)鳥取市教育福祉振興会埋蔵文化財調査センター、鳥取土木事務所工務第一課、同第二課、(宗)妙道会教團

福浜隆志、久保原二朗、小谷修一、杉谷美恵子、谷口恭子、坪田晴子、津村陽子、西上恵子、西浦日出夫、西尾和昭、藤本隆之、前田均、八幡興、山下孝子、渡部和子

(順不同、敬称略)

凡　　例

1. 本報告書に用いた方位は、第1図を除くすべてが磁北を示し、レベルは海拔標高である。
2. 本報告書における遺構の略号は次のとおりである。
SK：土坑、SD：溝状遺構、P：ピット状遺構
3. 今回の調査によって出土した遺物には、遺跡名、トレンチ名、取上げ年月日、遺物番号を基本的に注記した。また、遺物番号は遺跡ごとに付け、それぞれ遺物台帳に登録した。
4. 本報告書作成にあたってトレンチ名を現地調査時のものと変更したものがある。新旧のトレンチ名の対照は次のとおりである。なお出土遺物への注記は旧トレンチ名による。

秋里遺跡		八坂古墳群		桂見遺跡		山ヶ鼻遺跡	
新T r名	旧T r名						
T 1	T 2	T 1	T 3	T 1	T 4	(T 1)	
T 2	T 1	(T 2)		T 2	T 1	(T 2)	
		T 3	T 1	(T 3)		(T 3)	
				T 4	T 2	(T 4)	
						(T 5)	
						(T 6)	
						(T 7)	
						T 8	T 9
						T 9	T 10

※ 湖山第3遺跡と、対照表中の（ ）付きのトレンチ名は変更なし。

本文目次

序文

例言・凡例

Iはじめに	1
1. 発掘調査の契機と目的	1
2. 発掘調査の経過	1
II湖山第3遺跡	3
1. 遺跡の位置と環境	3
2. 発掘調査の概要	4
III秋里遺跡	7
1. 遺跡の位置と環境	7
2. 発掘調査の概要	7
IV八坂古墳群	10
1. 遺跡の位置と環境	10
2. 発掘調査の概要	11
V桂見遺跡	14
1. 遺跡の位置と環境	14
2. 発掘調査の概要	15
VI山ヶ鼻遺跡	19
1. 遺跡の位置と環境	19
2. 発掘調査の概要	20
VIIまとめ	28

挿図目次

第1図 調査地周辺道路分布図	2
第2図 湖山第3遺跡トレンチ配置図	4
第3図 湖山第3遺跡第1、第2、第4、第5トレンチ断面実測図	5
第4図 湖山第3遺跡 第3トレンチ平面・断面実測図	6
第5図 秋里遺跡トレンチ配置図	8
第6図 秋里遺跡第1、第2トレンチ平面・断面実測図	9
第7図 八坂古墳群トレンチ配置図	11
第8図 八坂古墳群第1、第2、第3トレンチ平面・断面実測図	12
第9図 八坂古墳群第1、第2トレンチ出土遺物実測図	13
第10図 桂見遺跡トレンチ配置図	14
第11図 桂見遺跡第1、第2トレンチ平面・断面実測図	15
第12図 桂見遺跡第2トレンチ出土遺物実測図	16
第13図 桂見遺跡第3、第4トレンチ平面・断面実測図	17
第14図 桂見遺跡第3、第4トレンチ出土遺物実測図	18
第15図 山ヶ鼻遺跡トレンチ配置図	20
第16図 山ヶ鼻遺跡第1トレンチ平面・断面実測図	21
第17図 山ヶ鼻遺跡第2、第3トレンチ平面・断面実測図	22
第18図 山ヶ鼻遺跡第4、第5トレンチ平面・断面実測図	23
第19図 山ヶ鼻遺跡第6、第7トレンチ平面・断面実測図	24
第20図 山ヶ鼻遺跡第8、第9トレンチ平面・断面実測図	26
第21図 山ヶ鼻遺跡第1、第3、第5、第6、第9トレンチ出土遺物実測図	27

図版目次

- 図版1 1. 湖山第3遺跡 第1トレンチ(東から)
2. 同左 第2トレンチ(東から)
3. 同上 第3トレンチ(西南西から)
4. 同左 第3トレンチ西北西壁断面(東から)
- 図版2 1. 湖山第3遺跡 第4トレンチ(東から)
2. 同左 第5トレンチ(西から)
3. 秋里遺跡 調査地航空写真(上空東から)
4. 同左 調査地近景(南西から)
- 図版3 1. 秋里遺跡 第1トレンチ(西から)
2. 同左 第2トレンチ(北から)
3. 八坂古墳群 調査地遠景(北西から)
4. 同左 第1トレンチ南西壁断面(東から)
- 図版4 1. 八坂古墳群 第2トレンチ南西壁断面(北から)
2. 同左 第3トレンチ南西壁断面(北から)
3. 同上 第2、第3トレンチ出土遺物
4. 同左 第2トレンチ出土鉄製品
- 図版5 1. 桂見遺跡 調査地遠景(南から)
2. 同左 調査地近景(南東から)
3. 同上 第1トレンチ南西壁断面(南南東から)
4. 同左 第2トレンチ南南西壁断面(南東から)
- 図版6 1. 桂見遺跡 第3トレンチ(南南西から)
2. 同左 第3トレンチ遺物出土状況(南南東から)
3. 同上 第3トレンチ遺物出土状況(東北東から)
4. 同左 第4トレンチ(北北西から)
- 図版7 1. 桂見遺跡 第3トレンチ出土遺物
2. 同左 第2、第3、第4トレンチ出土遺物
3. 同上 第2、第3トレンチ出土遺物
4. 同左 第2トレンチ出土遺物
- 図版8 1. 桂見遺跡 第3トレンチ出土木製品
- 図版9 1. 山ヶ鼻遺跡 調査地遠景(北から)
2. 同左 調査地近景(南から)
3. 同上 第1トレンチ南壁断面(北から)
4. 同左 第2トレンチ(北から)
- 図版10 1. 山ヶ鼻遺跡 第3トレンチ(北西から)
2. 同左 第4トレンチ(北から)
3. 同上 第5トレンチ(北から)
4. 同左 第5トレンチ北壁断面部分(南から)
- 図版11 1. 山ヶ鼻遺跡 第6トレンチ(南から)
2. 同左 第7トレンチ(東から)
3. 同上 第8トレンチ(北から)
4. 同左 第9トレンチ(南から)
- 図版12 1. 山ヶ鼻遺跡 第6トレンチ出土遺物
2. 同左 第6、第7、第8トレンチ出土遺物
3. 同上 第1、第3、第4、第5、第8トレンチ出土遺物
4. 同左 第3、第5、第8トレンチ出土遺物

I はじめに

1. 発掘調査の契機と目的

鳥取市は、鳥取県の東部に位置し面積23.9万m²、人口14万5千人を擁する山陰の中核都市である。県庁所在地として政治・経済・文化活動等の中心的な役割を担っている。市域の中心は、千代川の沖積作用によって形成された鳥取平野が占めており、平野の周辺部は丘陵地となっている。近年まで平野部は主として水田として利用され、丘陵地では二十世紀梨を中心とする果樹栽培が行なわれてきた。しかし、近年は企業進出による工場用地や住宅団地の造成等によって土地利用の変化が著しい。

肥沃な鳥取平野は、原始・古代から重要な生産基盤として人々の生活を支え、政治・経済・文化・交通の要地としての位置を占めてきた。このような地理的条件を背景として、鳥取市内には数多くの埋蔵文化財が残されている。これまでの分布調査によって2千箇所をこえる古墳、遺物散布地が発見されている。このため各種開発事業との調整が必要となる遺跡も近年増加の一途をたどっている。今回報告する湖山第3遺跡、秋里遺跡、八坂古墳群、桂見遺跡、山ヶ鼻遺跡もそれぞれ道路建設、寺院建設、公民館建設、河川改修等の開発事業が計画され事前に協議を受けたものである。それぞれの遺跡とも、開発事業との円滑な調整に必要な具体的な資料が少ないため、各遺跡の範囲、遺構の有無と埋蔵状況、遺跡の性格等の詳細な資料を得ることを目的として発掘調査を実施した。

2. 発掘調査の経過

発掘調査は、各調査地区ともトレント掘り下げによる遺構及び遺物包含層の確認に主眼をおいて湖山第3遺跡から着手し、その後、秋里遺跡、八坂古墳群、桂見遺跡、山ヶ鼻遺跡と順次実施した。

湖山第3遺跡は、平成5年7月19日から8月9日まで、設定した5本のトレントについて、暑い日差しの中掘り下げ、検出作業を行った。なお第1～第3トレントについては、削平あるいは宅地等の客土の存在が想定されたため、それらも考慮に入れながら調査を実施した。

秋里遺跡は、平成5年10月14日から10月18日に現地調査を行った。本調査地区は既に宅地としての客土が行われていたため、第1、第2トレントとともに確認しながら旧耕作土まで一気に掘り下げ、その後精査しながら掘り下げ、検出作業を行った。

八坂古墳群は、調査の都合上、平成5年10月12日に3本のトレント設定場所周辺の伐間を行い、秋里遺跡の現地調査終了を待って10月21日まで現地調査を行った。

桂見遺跡は、平成5年11月15日から12月1日まで、設定した4本のトレントについて、降雨や涌水に苦慮しながら掘り下げ、検出作業を行った。

山ヶ鼻遺跡は、平成5年12月9日から平成6年1月14日まで、設定した9本のトレントについて、降雨、降雪等の合間に縫って掘り下げ、検出作業を行った。

以上の結果、今回の市内遺跡の発掘調査面積はそれぞれ125m²、22m²、30m²、71m²、163m²（小数



第1図 調査地周辺遺跡分布図

点以下切捨て)で、計411m²となった。なお、調査開始前に涌水等による壁面崩壊の可能性のあるものについては、安全を期し、層序の変化する面あるいは造構面で振り下げる枠を適宜縮小し、段状に掘り下げていった。このためそれらのトレーニングの断面図は、同一方向の段状の各壁面を合成したものである。また、現地調査で作成した平面図・断面図の整理や写真・出土遺物の整理、報告書作成作業は、それぞれの現地調査終了後に順次行った。

II 湖山第3遺跡

1. 遺跡の位置と環境

湖山第3遺跡は、鳥取市湖山町地内に所在し、JR湖山駅の西北西約1kmの国道9号線と鳥取大学に挟まれた宅地、畑地等に位置する。本遺跡の所在する南西方向に湖山池を望む「濃山」台地は、古くから古墳が存在していたことを示す絵図が残っており、このことは、近年の鳥取大学教育学部による航空写真の検討でも確認されている。しかしながら、大正以降の開墾や空港整備による上砂採取、鳥取大学の移転、宅地開発等によって多くの古墳や遺跡が消滅していると考えられている。

濃山台地は標高10~30mを測るゆるやかな波状の起伏を持つ台地で、湖山第3遺跡は本台地の北東部のゆるやかな稜線部に位置する。本台地の基本層序は、表層にクロボク(黒色腐植質土)が堆積し、その下は上部ローム、中部ローム、大山倉吉バミスへと続き、周辺遺跡では主に中部ローム面が造構面として確認されている。

濃山台地を含む湖山池周辺は、古くから多くの原始・古代遺跡が知られており、その初源は縄文時代に遡る。主体は後期であるが、前期最終末から中期の土器も出土した桂見遺跡、中期の土器も出土した布勢遺跡、後期の青島遺跡の他、濃山台地内の湖山第2遺跡からも後期から晩期と考えられる土器が出土している。

弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡としては、湖山第2遺跡、岩吉遺跡が知られている。前者からは、玉作り工房と推定されている住居跡を含む20数棟の堅穴式住居跡等が検出されており、後者からは、鳥取県東部では初めての弥生時代に遡る水田造構や、同時期の掘建柱建物群が検出されている。その他の遺跡としては、布勢遺跡、大柄遺跡、流水文銅鐸が出土した高住遺跡等が知られている。

またこの時期の墳墓遺跡としては、弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓を検出した西桂見遺跡や桂見墳墓群、鶴指奥墳墓群があり、大規模古墳である精間1号墳(92m)や布勢1号墳(59m)といった前方後円墳の他、濃山台地上でも大熊段1・2号墳、三浦1・2号墳等がある。

律令体制になるとこの地域は因幡国高草郡に組み込まれ、特に湖山池南東岸地区が東大寺高庭荘として開発されたことが『東大寺東南院文書』によって知られている。その後15世紀には因幡守護山名氏が布勢天神山に築城し、因幡支配の拠点としたことが知られている。

2. 発掘調査の概要

発掘調査は前述の通り、遺構及び遺物包含層の確認に主眼をおきトレンチ掘り下げによって行った。対象地区は濃山台地のゆるやかな稜線部と谷部に位置し、標高20m程度の稜線部に3本、標高10~15m程度の谷部に2本の計5本のトレンチを設定した。以下、北側から第1、第2、第3、第4、第5トレンチとして、各トレンチ調査の概略を述べていきたい。

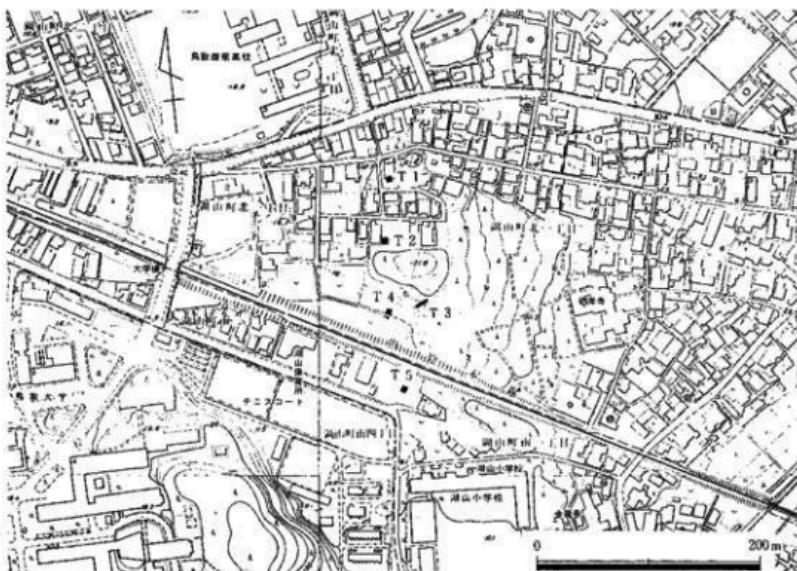
第1トレンチ(T1)

対象地区的最北部で、濃山台地のゆるやかな稜線部に設定した $5 \times 5\text{ m}$ (25 m^2) のトレンチである。標高19m程度を測る当地は、調査前まで宅地であり、住居の移転を待って調査を開始した。

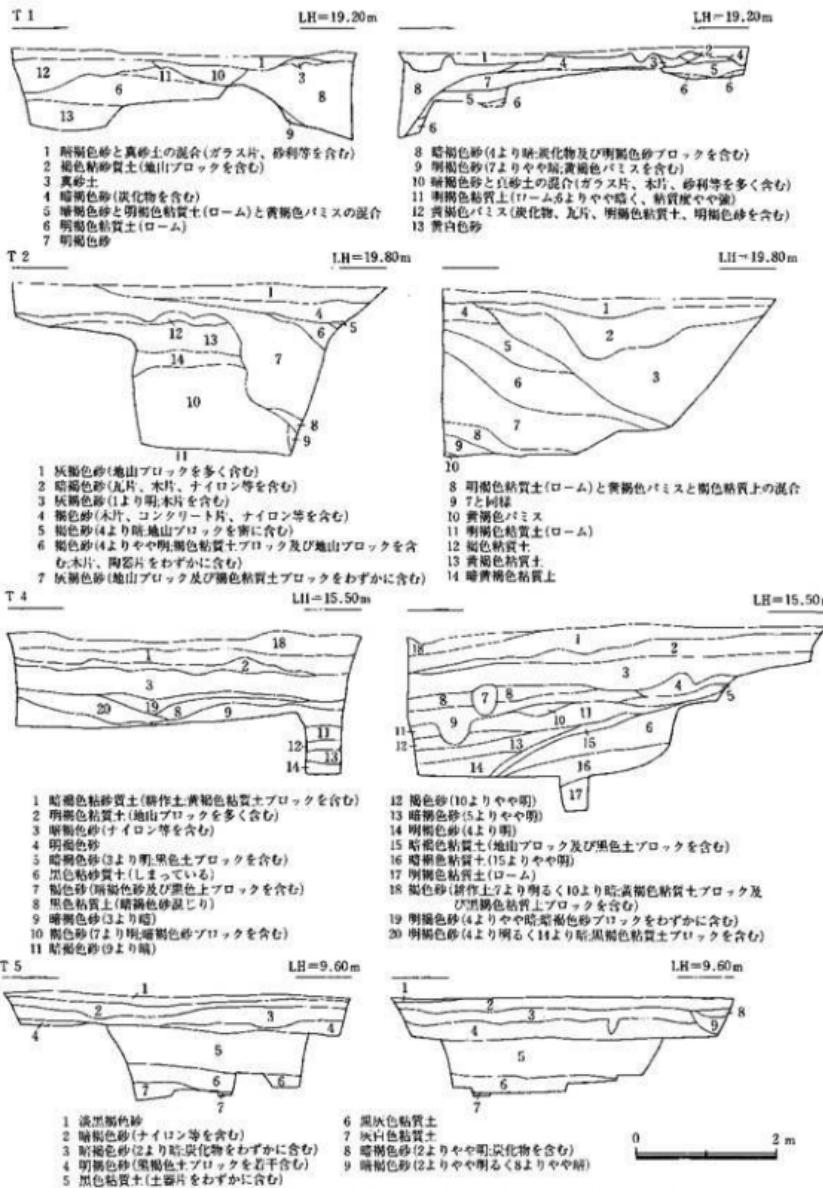
調査の結果、地表下約30cmまでは宅地化等による擾乱を受けしており、また一部で砂の堆積した落ち込みを確認したが、周辺の古窯の話等から戦時中の空港整備のための土砂採取等によるものと考えられる。なお、その下でローム層を確認したが、遺構は検出されなかった。遺物としては擾乱土中から上師器細片1が出土したに留まった。

第2トレンチ(T2)

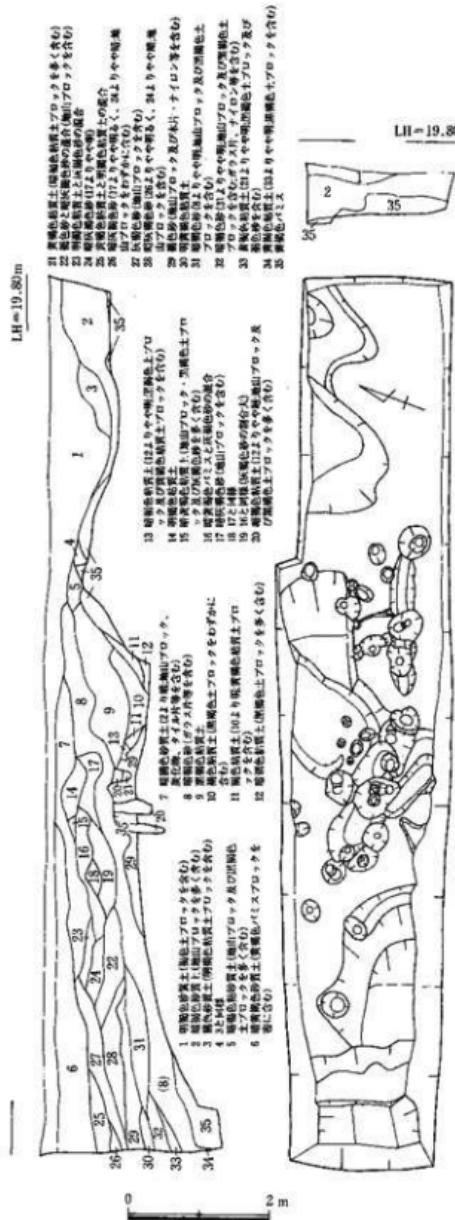
第1トレンチの南約50mの標高19.5m程度を測る稜線部に設定した $5 \times 5\text{ m}$ (25 m^2) のトレンチ



第2図 湖山第3遺跡トレンチ配置図



第3図 湖山第3遺跡第1、第2、第4、第5トレンチ断面実測図



第4図 湖山第3遺跡第3トレンチ平面・断面実測図

で、調査前は荒れ地であった。

調査の結果砂や現代ゴミの堆積した落ち込みを確認したが、第1トレンチと同様に後世の土砂採取後の落ち込みに周辺からの砂が自然堆積し、また一時期現代のゴミ捨て場所として使用されたものと考えられる。なお遺構は検出されず、遺物も前述の砂やゴミの堆積の中から土器質の土器片1が出上したに留まった。

第3トレンチ (T.3)

第2トレンチの南約60mの標高19.5m程度を測る稜線上の若干の傾斜の変換点に設定した $12.5 \times 2\text{ m}$ (25 m^2) のトレンチで、駐車場等として利用されていた場所である。当初古墳の周溝等の遺構存在も考えられたが、調査の結果、一部削平も認められる南北方向への傾斜地を近年埋立てして現況の平地を形成しているものと判明した。

本トレンチからは、遺存原地形の最高所で第1、第2トレンチと同様の土砂採取によるものと考えられる落ち込みが検出された他、同傾斜地で黄褐色バミス(第29層)に掘り込まれた土坑状、柱穴状の落ち込みが検出された。しかしながらこれらの検出面直上には大量の埋立てが行われており、また、その中からは相關関係が明白な遺物が全く出土していないこと等から、これらの落ち込みが当該の遺構であると積極的に判断するには至らなかった。なお遺物は、埋立て土壌中から現代陶器等の他に若干の土器細片が出土したに留まった。

第4トレンチ (T.4)

第2トレンチの南約60m、第3トレンチ

の西約20mの標高15.4m程度を測る谷部の畠地に設定した5×5m(25m²)のトレンチである。

第1～第3トレンチと同様の砂の堆積した落ち込みを確認したが、明確な遺構は検出されなかつた。また遺物は、砂層から混入と考えられる弥生土器、土師器、須恵器の細片がわずかに出土している。

第5トレンチ(T5)

JR山陰線を挟んだ第4トレンチの南約70mの谷部の畠地に設定した5×5m(25m²)のトレンチである。調査地区の最南部にあたり、標高は約9.5mを測る。

調査の結果、耕作土直下に浅い土坑状および溝状の落ち込みを検出したが、現代の耕作に関連したもののか可能性が高いと考えられる。遺物は、耕作土および第5(黒色粘質土)層から土師器、須恵器、土師質土器の細片、鉄釘が出土している。

なお各トレンチから出土した遺物は、遺構に伴わなかつたり細片であったため、図化できなかつた。

III 秋里遺跡

1. 遺跡の位置と環境

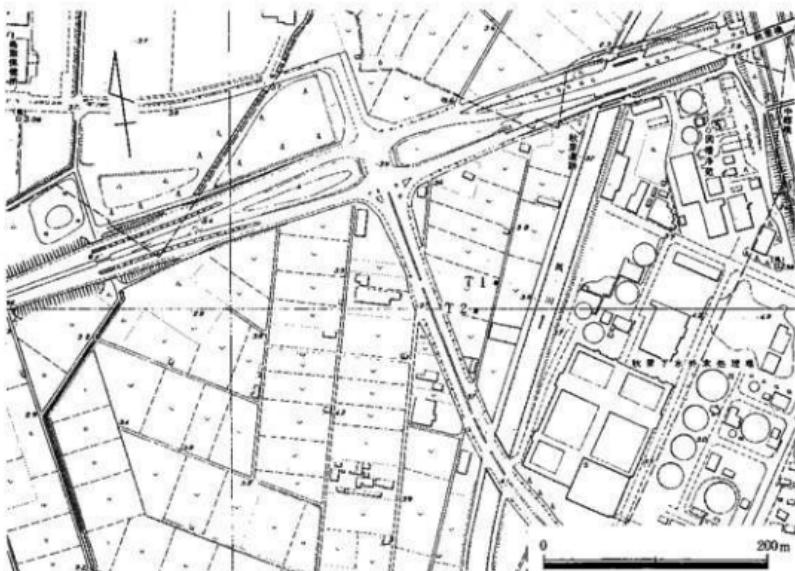
秋里遺跡は、鳥取市秋里・江津・松並町地内に所在し、JR鳥取駅の北北西約1.5kmに位置する、旧千代川左岸に形成された自然堤防上に立地した複合遺跡である。現在は蔬菜の市内への一大供給地として利用されるなか、区画整理事業が進行中である。

本遺跡は昭和49年6月に河川改修および国道9号バイパス工事中に発見され、その後数回の発掘調査の結果、大量の土器類とともに鳥、船、馬等を模した土製品、勾玉の石製模造品、舟型木製品等の出土する祭祀遺跡であることが明らかにされた。また近年の発掘調査では、弥生時代後期や奈良・平安時代の掘立柱建物跡、中世の道になる可能性のある石敷き遺構も一部で検出されており、弥生後期から中世に至る祭祀色の強い複合遺跡と考えられるようになってきている。

周辺の遺跡としては、北方の砂丘地内に縄文から古墳時代の遺物散布地である追跡遺跡や長者が庭遺跡が知られており、その他に開地谷古墳群、覚寺古墳群、円護寺古墳群、雁金山古墳群、浜坂横穴群がある。また、秋里地内には現在でも「ミシマノヤブ」と俗称される地が残っており、律令期の因幡国司が赴任の際に立ち寄ったとされる主要神社三崎社をしおぶことができる。戦国時代以前のものとしては、秀吉の鳥取城攻めの際のものと考えられる土壘が現在も衛生公社敷地内に残されている。

2. 発掘調査の概要

調査対象地区は、国道29号線の終点ともなる国道9号線との交差点の南東約100mに位置する。当該地は、既に宅地としての客上が成されていたが、発掘調査は、建物建設に際しての遺跡への影響をさぐるために、第1遺構面(中世面)が旧耕作地表面下どれくらいのレベルから検出されるかに注



第5図 秋里遺跡トレンチ配置図

眼をおいてトレンチ掘り下げによって実施した。トレンチは、建物建設予定場所を考慮し、同予定地の北東端部および南西端部に2か所設定し、それぞれ第1トレンチ($9.6\text{m}^2/3.2\times 3\text{m}$)、第2トレンチ($12.9\text{m}^2/4.3\times 3\text{m}$)とした。以下、両トレンチの概略を述べていきたい。

第1トレンチ (T.1)

前述の通り、現地表面下の厚さ約30~40cmの客土下に旧耕作土が遺存している。旧耕作土下は、無遺物層が続いた後、現地表面下約80cmの灰褐色粘質土(第11層)上面で溝状遺構を検出した。さらにその下の灰褐色粘質土(第12層)および灰褐色粘質土(第15層)からは少量ながら土師器や須恵器の細片が出土しており、両層とともに古墳時代から奈良・平安時代の遺物包含層と考えられる。

また、11層上面から検出した溝状遺構からは遺物は出土していないが、本遺跡のこれまでの調査結果等から中世の遺構と考えられる。

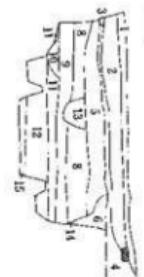
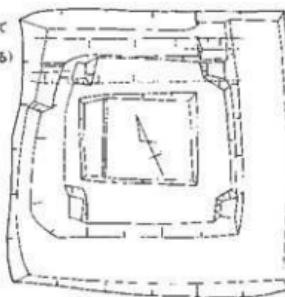
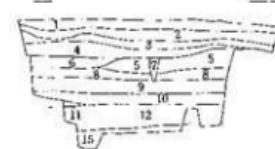
第2トレンチ (T.2)

第1トレンチと同様に現地表面下の厚さ約50cmの客土下に旧耕作土が遺存している。旧耕作土下は、無遺物層が続いた後、灰褐色粘質土(第9層)から土師器細片が出土しており第1トレンチの第12層に対応する古墳時代から奈良・平安時代の遺物包含層と考えられる。また、本トレンチからは遺構は検出されなかったが、土層の検討から第1トレンチの第11層に対応すると考えられる灰褐色粘質土(第6層)上面が、中世の遺構面と考えられる。

T 1

LH=3.70m

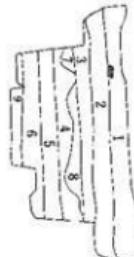
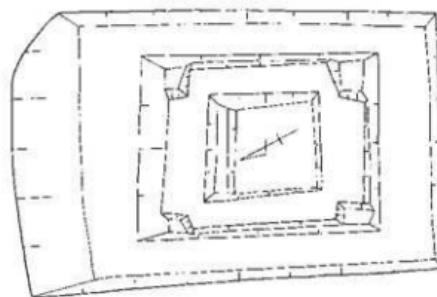
- 1 黄褐色真砂土(客土)
- 2 黄灰褐色砂質土(2~3cm大の礫を多く含む:客土)
- 3 磨床褐色砂質土(客土)
- 4 明褐色砂土(客土)
- 5 黑褐色砂質土(3より明:旧耕作土)
- 6 黑褐色砂質土(3より明るく、5より暗)
- 7 黑褐色砂質土(3より明るく、5より暗)
- 8 明褐色シルト
- 9 淡褐色シルト(8よりやや粘質)
- 10 黑褐色粘質土(無分・マンガン分を密に含む)
- 11 黑褐色粘質土(10より明:無分・マンガン分を密に含む:しまっていふ)
- 12 黑褐色粘質土(11より明:無分・マンガン分を含む:しまっている)
- 13 明褐色シルト(8よりやや明)
- 14 黑褐色粘質土(10よりやや暗)
- 15 黑褐色粘質土(10より明るく、11~12よりやや暗)



T 2

LH=3.70m

- 1 黄褐色真砂土(客土)
- 2 黄灰褐色砂質土(2~3cm大の礫を多く含む:客土)
- 3 磨床褐色砂質土(旧耕作土)
- 4 明褐色シルト
- 5 黑褐色砂質土(5よりやや粘質分・マンガン分を多く含む:しまっている)
- 6 黑褐色粘質土(5よりやや粘質分・マンガン分を多く含む:しまっている)
- 7 黑褐色粘質土(3より明)
- 8 黑褐色粘質土(5~6より灰褐色偏)
- 9 淡褐色粘質土(6よりやや暗:マンガン分を多く含む:しまっている)



第6図 秋里遺跡第1、第2トレーンチ平面・断面実測図

なお、両トレンチともここまで当初の目的を果たしたため以下の遺構の保存も考慮してこれ以上の掘り下げは行わなかった。また、出土遺物は細片のため固化できなかった。

IV 八坂古墳群

1. 遺跡の位置と環境

八坂古墳群は、JR鳥取駅より南へ5kmほど離れた八坂集落の背後の丘陵地に展開している。本古墳群の所在するこの丘陵地は鳥取市と郡家町を界する空山(標高340m)へと続き、丘陵の間にはいくつもの小平野が形成されて入り組んだ地形となっている。丘陵間の小平野は緩やかな傾斜をもって沖積平野である鳥取平野へと続き、この肥沃な平野は古代から現代に至るまで人々の生活を支える重要な生産基盤となっている。

八坂地区の所在する鳥取平野南部において人々の生活の痕跡が最初に認められるのは縄文時代においてである。大路川遺跡がそれにあたり、貯藏穴から後期から晩期の土器や土製耳飾、石皿やトチ、アラカシといった堅果類が出土している。

弥生時代になると、上述の大路川遺跡の他に掘建柱建物等を検出した久末・古郡家遺跡や生山大池遺跡、西大路上居遺跡が知られる。西大路上居遺跡は弥生前期から中世まで続く複合遺跡で、多くの堅穴住居跡や掘建柱建物等が検出され、多量の土器の出土とともに銅剣の出土でも注目を集めた。この他の遺跡としては、弥生後期の墳丘墓が検出された紙子谷門上谷遺跡や流水文銅鋒の出土した越路遺跡が知られている。

古墳時代になると鳥取市南部の丘陵地帯には大小様々な古墳が築造され、市内でも有数の古墳密集地帯となっている。なかには100基以上で古墳群を形成するものもあり、八坂古墳群も現在のところ120数基を数えている。幾つか例をあげて見ると、前・中期を代表するものとしては、円筒埴輪棺や変形獸首鏡が出土した六部山3号墳(全長63m)、八ツ手葉形鏡や短甲等が出土した古郡家1号墳(全長90m)といった大型前方後円墳がある。また後期になると、横穴式石室を埋葬施設とする小規模古墳が群集墳を形成し、なかには線刻壁画のある広岡11号墳(坊ヶ塚古墳)や家型石棺を持つ橋本古墳などがある。

古墳時代の集落遺跡については、前述の弥生時代から続く久末・古郡家遺跡や生山大池遺跡、西大路上居遺跡が知られる他は、堅穴住居跡等が検出された津ノ井字跡遺跡や広岡西矢谷遺跡がわずかに知られるのみである。その他この時期の遺跡としては、生産遺跡である越路古窯跡群をあげることができる。大路川右岸の丘陵地に展開する須恵器窯跡群で、主たるものは後期の須恵器であるが、古式のものも採取されている。

律令時代になるとこの地域は因幡国邑美郡、法美郡に組み込まれ、因幡国府が法美郡に置かれることとなる。次いで中世では、条里遺構が推定されており、本年度木簡等が出土した官長竹ヶ鼻遺跡がある。また近世・近代では、釣鐘鋳造が行われていた大代鐘鋳谷遺跡が知られている。

2. 発掘調査の概要

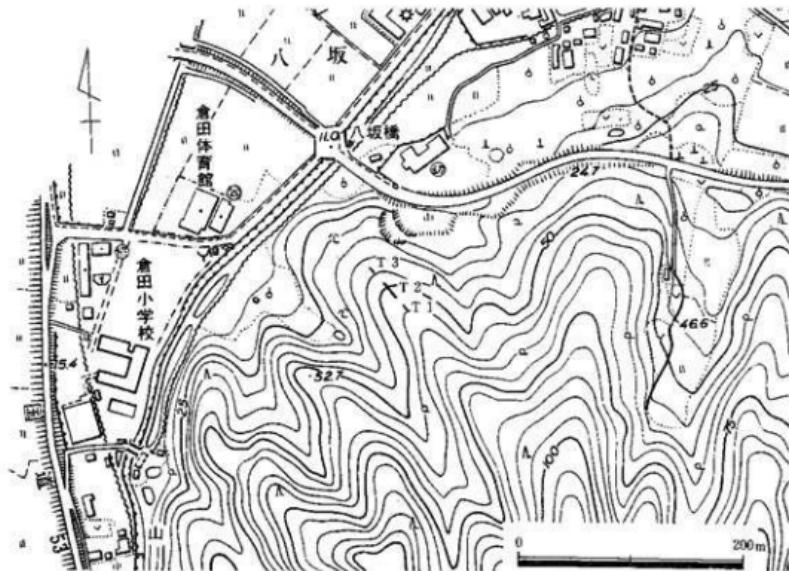
調査対象地区は丘陵の稜線部に位置し、当初から古墳存在の可能性が考えられていた地区である。このため、発掘調査は周溝等の遺構の確認に主眼をおいて地形の変換点等を目安に稜線上に3本のトレンチを設定した。以下、稜線の高所から第1、第2、第3トレンチとして、各トレンチ調査の概略を述べていきたい。

第1トレンチ(T1)

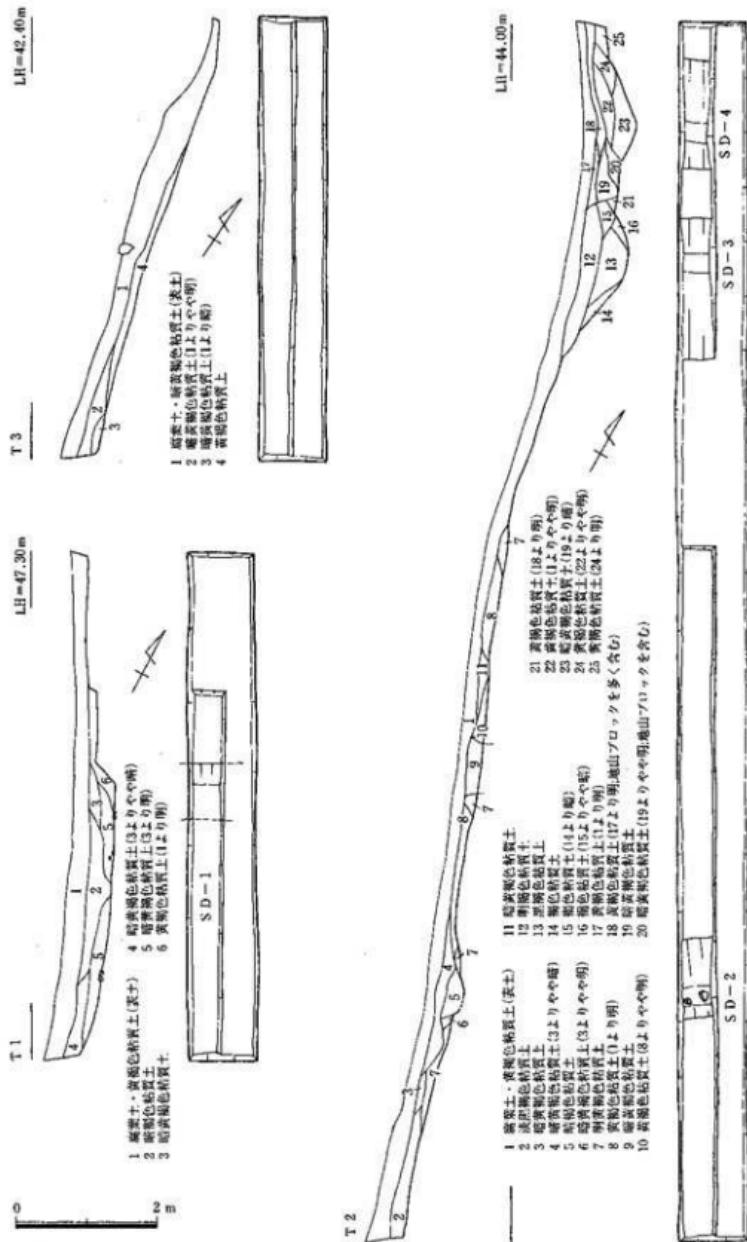
3本のトレンチのうち、最高所にあたる標高約47mの傾斜の変換点に設定した $7.1 \times 1\text{ m}$ (7.1 m^2)のトレンチである。古墳の周溝と考えられる溝状遺構(SD-1)を検出するとともに埴輪片(挿図9-1)等が出土した。

第2トレンチ(T2)

第1トレンチの北約10mの緩斜面から傾斜の変換点にかけて設定した $17.3 \times 1\text{ m}$ (17.3 m^2)のトレンチである。トレンチの南側からは、溝状遺構(SD-2)が検出され、床面から石2点が出土した。またトレンチ中央部からは明確な検出はできなかったものの遺構の可能性も考えられる微妙な土色の変化が認められ、その上面から古墳時代の鉄斧(挿図9-3)と鉄製鍬先(同-4)が出土している。さらにトレンチ最北部からは切り合い部分は後世の擾乱を受けているものの2条の古墳の周溝と考えられる溝状遺構(SD-3、-4)を検出した。なお、表土中から弥生時代後期の壺の破片(同-2)



第7図 八坂古墳群トレンチ配置図

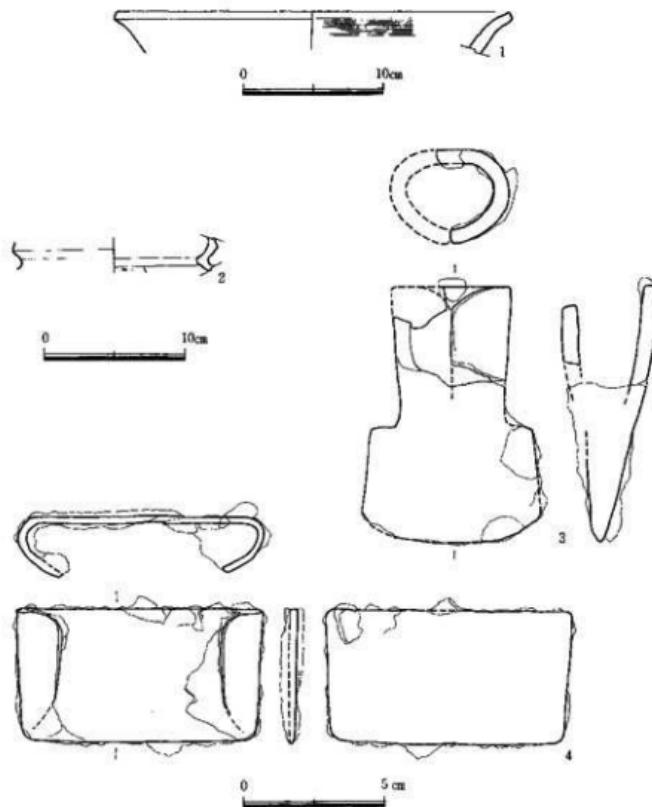


第8図 八坂古墳群第1、第2、第3トレンチ平面・断面実測図

が出土している。

〔第3トレンチ(T3)〕

第2トレンチの北約15mの傾斜の変換点に設定した $6.3 \times 1\text{ m}$ (6.3m^2)のトレンチである。本トレンチからは明確な遺構は検出されなかったが、断面をよく観察すると、古墳の盛土の可能性が考えられる土層が認められた。また、細片のため図化はしていないが、土師器高杯の破片が出土している。



第9図 八坂古墳群第1、第2トレンチ出土遺物実測図

V 桂見遺跡

1. 遺跡の位置と環境

桂見遺跡は、鳥取市桂見地内に所在し、JR鳥取駅の西約5km、JR湖山駅の南西約1.5kmに位置する。鳥取市の西北部に広がる湖山池は周囲約16km、面積約6.8km²を測る日本一広い池で、千代川の堆積作用と湖山砂丘の発達によって形成された潟湖である。本遺跡は、この湖山池の南東部に放射状に張り出す低丘陵の北側に形成された沖積地に立地している。現在遺跡周辺は主に水田として利用されているが、耕作土下は、砂層あるいは「ガマクソ」と呼ばれるマコモやガマの木分解植物遺体堆積層(泥炭層)となっており、この地が古代においては砂洲と入り江の入り組んだ地形となっていたことを想像させる。

周辺の遺跡については前述の湖山第3遺跡で概観したため、ここでは本遺跡を中心として若干ふれておくこととする。

桂見遺跡は、昭和51(1976)年の団体営桂見地区は場整備工事の際に発見された遺跡である。同年、鳥取市教育委員会によって発掘調査が行われ、主体は縄文時代後期ながら前期末まで遡るものも含まれる土器や櫛、舟状木製品等の多量の木製品、スタジイ、オニグルミ、トチ、ヒシといった食用と考えられる種子類が出土し注目を集めた。その後行われた本遺跡の東隣の布勢遺跡の調査では、黒と朱の漆で塗られた壺型木製品や櫛、もじり編みのカゴ、耳栓といった縄文時代当時の生活をほ



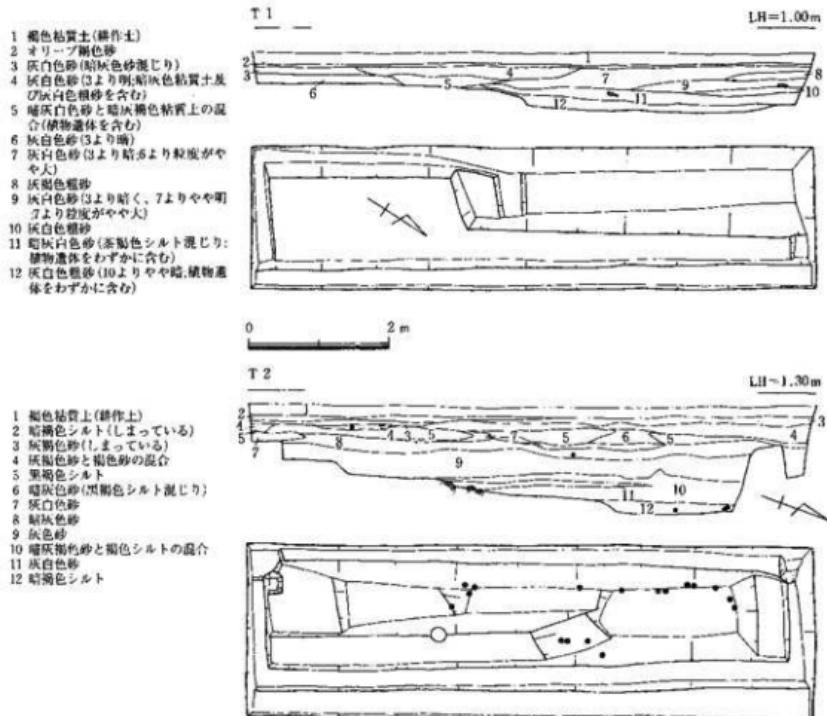
第10図 桂見遺跡トレンチ配置図

うふとさせる遺物が出土し、また本年度(財)鳥取県教育文化財団が実施した桂見遺跡の調査では、現存する縄文時代のものとしては最大級の丸木舟が出土するなど、この地域の縄文文化の豊かさをしのばせている。

縄文時代以降も桂見遺跡およびその周辺では、弥生時代から中世に至る遺構や遺物が発掘調査等によって検出されており、この地域に人々の生活が連続と営まれたことを示している。

2. 発掘調査の概要

対象地区はその北西端が湖山池に接する標高1m前後の水田地帯である。発掘調査は、遺構及び遺物包含層の確認に主眼をおき、現況の用水路に沿って湖山池側から第1、第2、第3、第4トレントンチを設定して実施した。多量の涌水とトレントンチ壁面の崩壊に苦慮したが、以下に各トレントンチ調査の概略を述べていきたい。



第11図 桂見遺跡第1、第2トレントンチ平面・断面実測図

第1トレンチ (T-1)

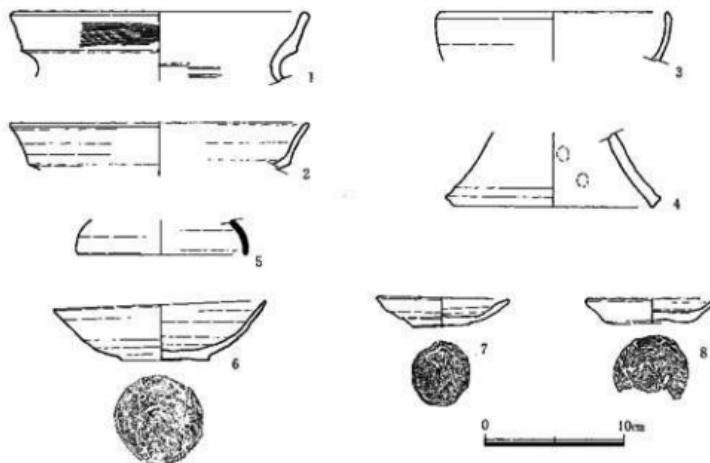
対象地区の北西部、湖山池から約40mの同池表水面とほぼ同レベルの標高約0.6mの水田部に設定した $8 \times 2\text{ m}$ (16 m^2) のトレンチである。15~20cm程度の耕作土(第1)層下は砂の堆積層となり、新しい時期のものと考えられる暗渠が床土と考えられるオリーブ褐色砂(第2)層下で検出された他は、明確な遺構は検出されなかった。遺物は灰白色砂(第3、第4)層から陶磁器片2と中世の土鍋片1が出土したが、かなりローリングを受けており、二次堆積あるいは混入と考えられる。

第2トレンチ (T-2)

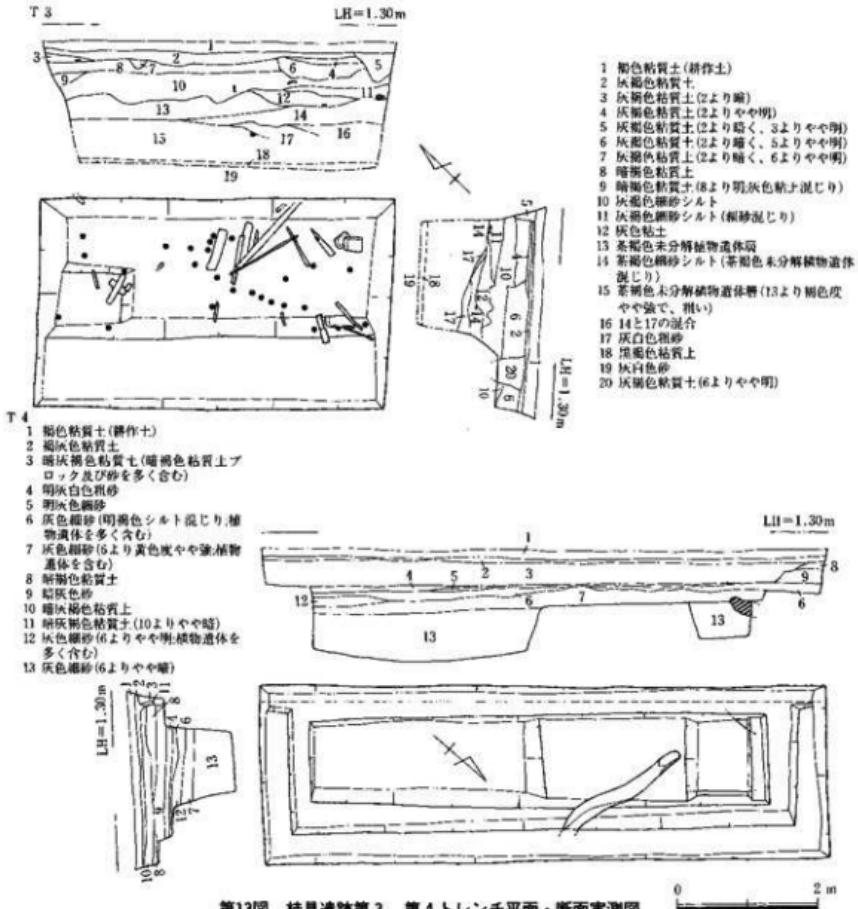
第1トレンチの南東約110m、標高約1.1mの水田に設定した $8 \times 2.5\text{ m}$ (20 m^2) のトレンチである。15cm程度の耕作土(第1)層、10cm程度の床土(第2、第3)層下に、部分的に客土(第4)層が認められる。その下の黒褐色シルト(第5)層以下が遺物包含層で、第5、第7(灰白色砂)、第8(暗灰色砂)、第9(灰色砂)、第10(暗灰色砂と褐色シルトの混合)層からは、主に土師器器台や須恵器片、中世の土師質碗(挿図12-6)・同皿(同7、8)が出土しているが、縄文土器細片も第9層からわずかに出土している。また、第12層からは、弥生土器の壺片(挿図12-1)、口縁部片(同3)、脚部片(同4)、土師器の壺片(同2)、須恵器の杯蓋片(同5)が出土している。

第3トレンチ (T-3)

第1トレンチの南東約60m、標高約1.1mの水田に設定した $5 \times 3\text{ m}$ (15 m^2) のトレンチである。15cm程度の耕作土(第1)層、5~20cm程度の床土(第2)層下で、暗渠(第20層)を検出した。また第



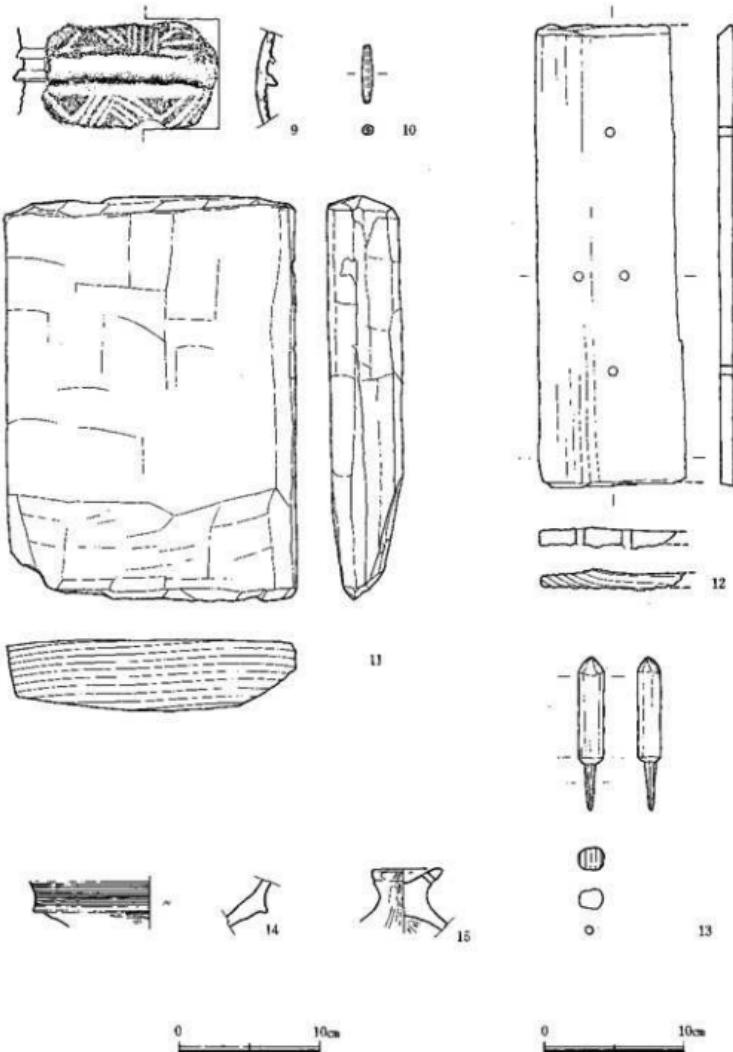
第12図 桂見遺跡第2トレンチ出土遺物実測図



第13図 桂見遺跡第3、第4トレンチ平面・断面実測図

8(暗褐色粘質土)層上面および第13(茶褐色未分解植物遺体)層上面からは落ち込み(第6層/灰褐色粘質土、第12層/灰色粘土)を検出し、12層底部からは弥生土器片が出土した。

灰褐色細砂シルト(第10層以下)が遺物包含層で、第10層からは、主に弥生土器片、土師器片、鐵形木製品、ひご状木製品、板材といった多量の木製品(挿図14-12、13)、トチの実等が出土し、1点ながら繩文土器片(同-9)も出土した。また、第14(茶褐色細砂シルト)層からは鏽や未製品と考えられる木製品(挿図14-11)が、第15(茶褐色未分解植物遺体)層からは繩文土器片、ヒシの実?が出上している。なお第15層の下は、多量の涌水と壁面崩壊の危険性から掘り下げができなかったが、



第14図 桂見遺跡第3、第4トレンチ出土遺物実測図

数か所の部分掘り下げを行った結果、第15層上面から約55cm下で5~10cm程度の黒褐色粘質土(第18)層とその下の灰白色砂(第19)層を確認した。

第4トレンチ (T4)

第3トレンチの南東約15m、標高約1.1mの水田に設定した8×2m(16m²)のトレンチである。10cm程度の耕作土(第1)層、5cm程度の床土(第2)層下に暗渠を確認し、その埋土である暗灰褐色粘質土(第3)層中から弥生後期の器台と蓋(挿図14-14、-15)を検出した。床土の下は暗灰褐色粘質土(第10)層、暗褐色粘質土(第8)層と続き、その下は砂層となっている。遺物は、上述以外のものとしては植物遺体を含む第6層(灰色細砂)と第7層(灰色細砂)の境界から繩文土器片1点が出土したほか、第7層からトチの実が出土している。また、第9層と第4層の境界および第13層から自然木が検出されている。

VI 山ヶ鼻遺跡

1. 遺跡の位置と環境

山ヶ鼻遺跡は、鳥取市菖蒲・古海・本高地内に所在し、JR鳥取駅の西南西約2.2km、千代川下流左岸を北流する大井手川下流域に位置する。本遺跡周辺は千代川およびその支流の有富川によって形成された沖積平野で、現在水田や畑地として利用されている。

周辺の遺跡としては、繩文時代のものとして前出の桂見遺跡、青島遺跡、布勢遺跡の他、千代川の自然堤防上に立地する古海遺跡等が知られている。弥生時代のものとしては、繩文時代から引き続き営まれた青島遺跡や古海遺跡の他、前出の岩吉遺跡、住居跡等の検出された北村恵儀谷遺跡、田下駄や大足の出土した服部遺跡、木遺跡のすぐ南に位置する菖蒲遺跡が知られている。

古墳時代になると平野部では上述の遺跡等が引き続いだり営まれる他、丘陵部では県東部で最大級の前方後円墳をはじめとした大小様々な古墳が築造される。その内の大部分は小規模な円墳や方墳であるが、大型のものとしては、前方後円墳の楠岡1号墳(92m)、布勢1号墳(59m)、前方後方墳の古海36号墳(67m)等がある。また大きな岩をくり抜いて造った石室を持つ山ヶ鼻古墳や、全長25m前後の小型の前方後円墳を含む鈴山古墳群、桂見墳墓群があり、平野部の遺跡の消長と合わせて当時の政治的・社会的変容を考える上で貴重な資料となっている。

律令体制下では、前述の通り、この地域は東大寺領高庭荘として開発が進められていったことが知られている。この時期の遺跡としては白鳳期の創建といわれる菖蒲庵寺跡があり、現在も本遺跡の約400m南東の水田中に塔心礎が遺存している。またその他の遺跡として、上述の古海遺跡、北村恵儀谷遺跡、菖蒲遺跡があり、本遺跡の北約1.4kmには、土師氏ゆかりの大野見宿禰命神社も所在する。現在、菖蒲庵寺跡および菖蒲遺跡周辺には古代山陰道や郡衙の存在が推定されているが、本年度の菖蒲庵寺跡発掘調査では縦柱建物跡や墨書き土器、円面鏡、土馬等が検出されており、今後の調査・研究が待たれる。

なお山ヶ鼻遺跡を東西に分断するように北流する大井手川は、羽柴秀吉の因縁侵攻後鹿野城主となつた龟井茲矩が慶長年間(1596-1614)に行った千代川左岸下流域の治水事業に伴つて開発したもので、その後のこの地域の安定した用水確保を可能にしている。

2. 発掘調査の概要

発掘調査は、造構及び遺物包含層の確認に主眼をおきトレンチ掘り下げによって行った。対象地区は標高8m程度の水田・畑作地帯で、大井手川に沿つて右岸に4本(南から第1、第2、第4、第7トレンチ)、左岸に5本(同じく南から第3、第5、第6、第8、第9トレンチ)の計9本のトレンチを設定した。第1、第2、第4、第7トレンチが鳥取市大字葛蒲、第3トレンチが同本高、第5、第6、第8、第9トレンチが同古海にあたる。以下、各トレンチ調査の概略を述べていきたい。

第1トレンチ(T1)

対象地区最南東部で天原橋の北約30m、大井手川右岸の標高約8.3mを測る畑地に設定した5×4m(20m²)のトレンチである。厚さ10~15cm程度の耕作土下に同10~20cmの客土(第2、第3)層が認められ、中から土師器片、須恵器片、埴輪片が出土している。第7(灰褐色シルト)層上面が造構面で、出土遺物から古墳時代から中世のものと考えられる土坑状造構が検出されている。また、第4(明褐色粘質土)層、第6(褐色細砂シルト)層、第7層が古墳時代から中世のものと考



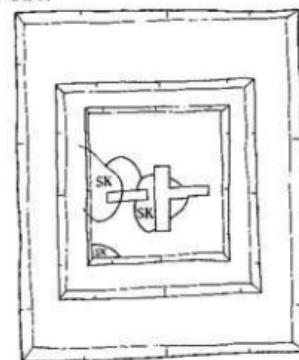
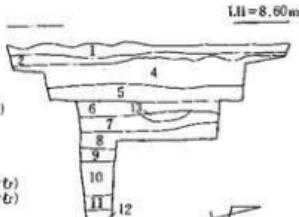
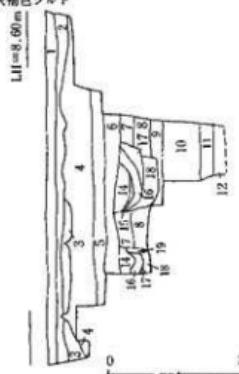
第15図 山ヶ鼻遺跡トレンチ配置図

えられる遺物包含層で、
いざれからも土師器片、
須恵器片が出土している
(第4層; 挿図21-2、第
6層; 同1)。なお、耕作
土中から土師器片、須恵
器片以外に中世の土鍋片
が出土しているほか、図
化できなかったが、噴砂
および砂脈を確認した。

第2トレンチ(T-2)

第1トレンチの北西約
50m、大井手川右岸の標
高約8mを測る畑地に設
定した8×2m(16m²)の
トレンチである。厚さ10
~15cm程度の耕作土下に
同30~40cmの客土(第2、
第10層)層が認められ、中

- T-2
 1 黄褐色粘質土(耕作土)
 2 灰褐色粘質土
 3 灰色粘質土
 4 明褐色粘質土
 5 明褐色細砂シルト(より暗)
 6 灰褐色細砂シルト(土器片、炭化物を含む)
 7 黄灰褐色シルト(鉄分を多く含む)
 8 黄灰褐色シルト(よりやや明、鐵分を多く含む)
 9 黄灰褐色シルト(よりやや明、鐵分を多く含む)
 10 灰褐色粘質土(2、7より暗)
 11 灰褐色粘質土(2、7より暗)
 12 灰褐色細砂シルト
 13 灰褐色粘質土(6よりやや暗上部器片、炭化物を含む)
 14 灰褐色粘質土(6よりやや暗下部器片、炭化物を含む)
 15 黄褐色粘質土(10より明)
 16 黄褐色細砂シルト(鉄分を多く含む)
 17 黄褐色粘質土
 18 黄灰褐色粘質土(17より暗、黄灰褐色セブロックを含む)
 19 灰褐色シルト



第16図 山ヶ鼻遺跡第1トレンチ平面・断面実測図

から土師器片、須恵器片や中世の羽釜片が出土している。第6(明褐色粘質土)層上面が遺構面で、出土遺物から古墳時代から中世のものと考えられるピット状遺構が検出されている。また、第3(灰色粘質土)層、第5(暗灰色粘質土)層、第6層が古墳時代から中世のものと考えられる遺物包含層で、第3層からは須恵器片、陶磁器が、第5層、第6層からは土師器片、須恵器片等が出土している。

第3トレンチ(T-3)

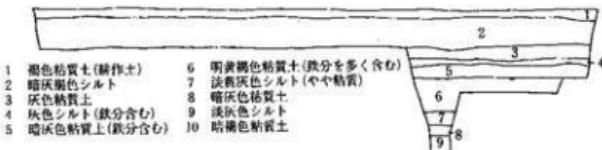
第2トレンチの大井手川をはさんだ対岸の標高約7.5mを測る水田部に設定した8×2.5m(20m²)のトレンチである。厚さ10~15cm程度の耕作土下に同程度の無遺物層があり、その下の第4(暗灰色細砂シルト)層、第6(黄灰褐色細砂シルト)層、第12(灰色シルト)層が古墳時代から中世のものと考えられる遺物包含層となっている。遺物は、土師器片、須恵器片(挿図21-3)や中世の上鍋片・羽釜片、土鍤(同4、5)が出土している。遺構面は第6層上面で、古墳時代から中世のものと考えられる土坑、ピット状遺構が検出された。また、第4層上面まで吹き上げる噴砂および砂脈が検出されている。

第4トレンチ(T-4)

第1トレンチの北西約60m、大井手川右岸の標高約8.1mを測る畑地に設定した5×4m(20m²)

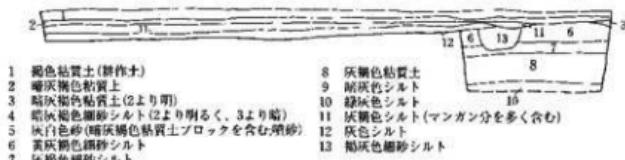
T 2

LH=8.30m



T 3

LH=7.80m



1 褐色粘質土(耕作土)

8 廃褐色粘質土

2 墓灰褐色粘質土

9 墓灰褐色シルト

3 墓灰褐色粘質土(2より明)

10 緑灰色シルト

4 墓灰褐色細緻シルト(2より明るく、3より暗)

11 墓灰褐色シルト(マンガン分を多く含む)

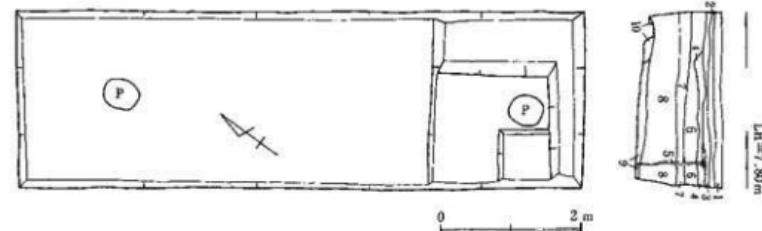
5 朱白色砂(墓灰褐色粘質土ブロックを含む噴砂)

12 灰色シルト

6 墓灰褐色細緻シルト

13 墓灰褐色細緻シルト

7 墓灰褐色細緻シルト



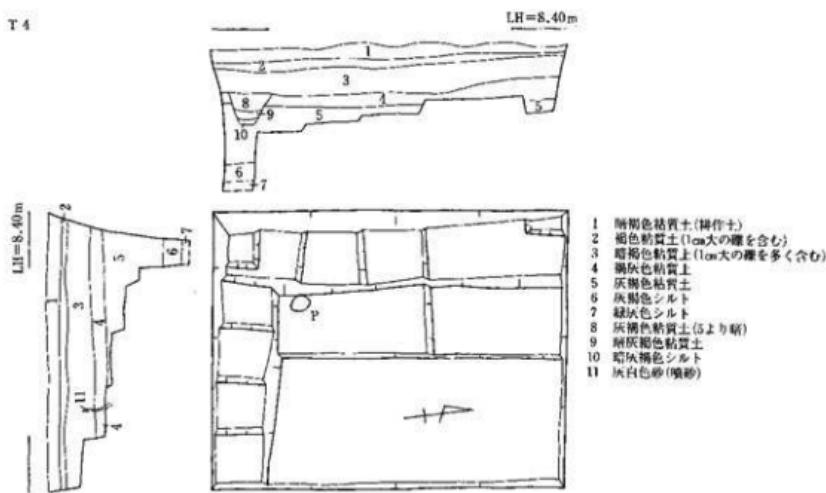
第17図 山ヶ鼻遺跡第2、第3トレンチ平面・断面実測図

のトレンチである。耕作土および第2(褐色粘質土)層から土師器片、須恵器片、瓦質土器片が出土し、客土と考えられる第3(暗褐色粘質土)層から弥生上器片、土師器片、須恵器片や甌片が出土している。また遺構面は4層上面で、土坑およびピット状遺構を検出しており、古墳時代から中世のものと考えられる。なお、第3層途中で止まる噴砂および砂脈を検出した。

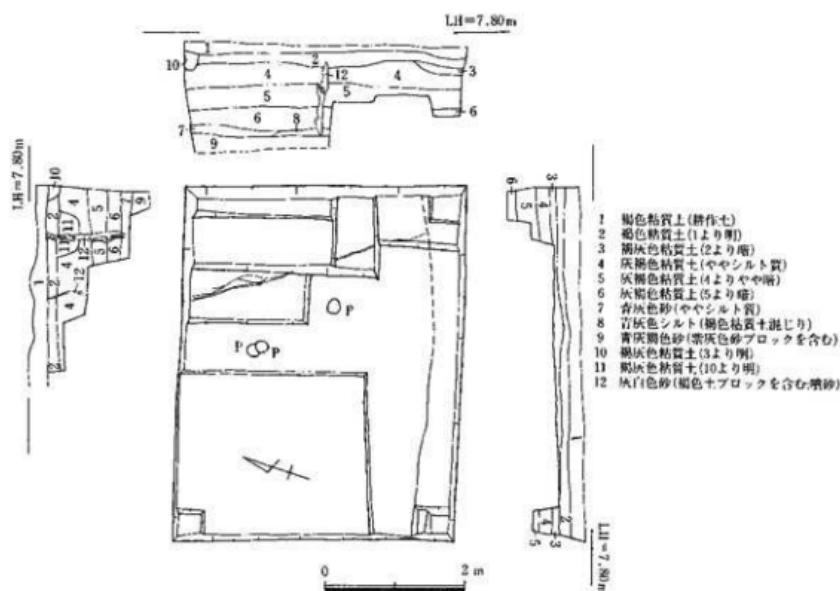
第5トレンチ(T 5)

第4トレンチの大井手川をはさんだ対岸の標高約7.7mを測る畠地に設定した5×4m(20m²)のトレンチである。厚さ10~20cm程度の耕作土上下の第2(褐色粘質土)層が古墳時代から中世のものと考えられる遺物包含層で、土師器片、須恵器片が出土し、耕作土中からも同様の遺物のほかに中世

T 4



T 5

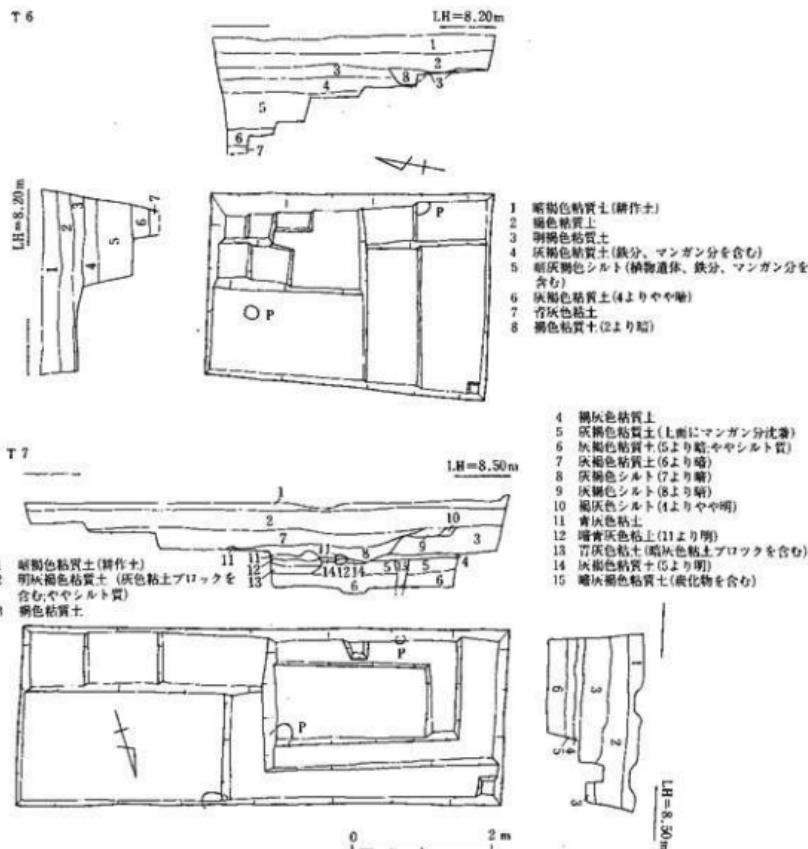


第18図 山ヶ鼻遺跡第4、第5トレンチ平面・断面実測図

の羽釜片(挿図21-6)が出土している。この下の第3(褐色粘質土)層上面が古墳時代から中世のものと考えられる遺構面で、土坑、ピット、溝状遺構を検出し、土坑からは土師器片が、溝状遺構からは土師器片、須恵器片が出土している。また、第2層上面付近まで吹き上がる噴砂および砂脈が検出されている。

第6トレンチ(T6)

第5トレンチの北北東約40m、大井手川左岸の標高約8mを測る畠地に設定した4×2.5m(10m²)のトレンチである。厚さ20cm程度の耕作土下が遺物包含層で、第2(褐色粘質土)層からは土師器片、須恵器片、石斧が、第3(明褐色粘質土)層からは弥生土器底部片(挿図21-9)、土師器片、須恵器



第19図 山ヶ鼻遺跡第6、第7トレンチ平面・断面実測図

片が、第4(灰褐色粘質土)層からは土師器片、須恵器片が出土している。また、第5(暗灰褐色シルト)層、第6(灰褐色粘質土)層からは縄文時代後期の鉢(挿図21-7、8)が出土している。遺構面は第3層上面と第4層上面で、それぞれピット状遺構を検出し、前者からは須恵器片が出土している。

第7トレーナー(T7)

第6トレーナーの大井手川をはさんだ対岸の標高約8.1mを測る畠地に設定した $7 \times 2.5\text{m}$ (17.5m²)のトレーナーである。厚さ10~20cm程度の耕作土下に弥生土器片、土師器片、須恵器片を含む約30cm程度の客上があり、その下に旧耕作上と考えられる第7(灰褐色粘質土)層、第8(灰褐色シルト)層が、またその下の一部に客上と考えられる第11(暗青灰色粘土)層、12(暗青灰色粘土)層、13(青灰色粘土)層がある。その下の第5(灰褐色粘質土)層、第6(灰褐色粘質土)層が古墳時代から中世のものと考えられる遺物包含層で、いずれからも土師器片、須恵器片が出土している。また、遺構面は第5層上面と第6層上面で、いずれも古墳時代から中世のものと考えられるピット状遺構が検出されている。

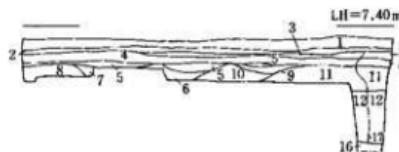
第8トレーナー(T8)

第6トレーナーの北北東約110m、大井手川左岸の標高約7.3mを測る水田部に設定した $5 \times 4\text{m}$ (20m²)のトレーナーである。厚さ15cm程度の耕作上下に薄い無遺物層があり、その下の第4層が遺物包含層で、弥生土器片(挿図21-10、11)、土師器片、須恵器片(同12、13)や中世の上鍋片(同12、14)が出土している。また、遺構面は第2層、第3層、第11層上面で、それぞれ、溝状遺構、土坑状遺構?を検出し、第11層上面から掘り込まれた溝状遺構からは弥生土器片が出土している。なお、第2層ないし3層途中で止まる噴砂および砂脈を検出した。

第9トレーナー(T9)

対象地区最北西部で、第8トレーナーの北約30m、大井手川左岸の標高約7.3mを測る水田部に設定した $5 \times 4\text{m}$ (20m²)のトレーナーである。厚さ15cm程度の耕作土下の第2(褐灰色粘質土)層、第3(暗灰色粘質土と黄褐色粘質土の混合)層、第4(暗灰褐色シルト)層、第5(暗灰褐色シルト)層および第9(黒灰色粘土)層が遺物包含層である。第2層および第3層からは古墳時代から中世のものと考えられる土師器片、須恵器片が、第4層、第5層および第9層からは弥生土器片が出土している。なお、第2層から掘り込まれる暗渠と考えられる落ち込みを検出した以外には、明確な遺構は検出されなかった。

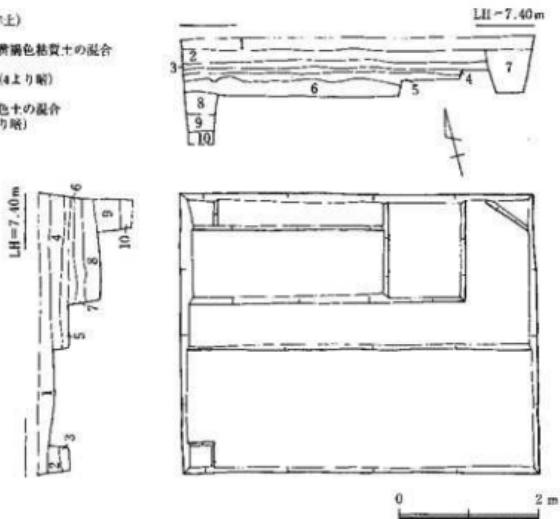
T 8



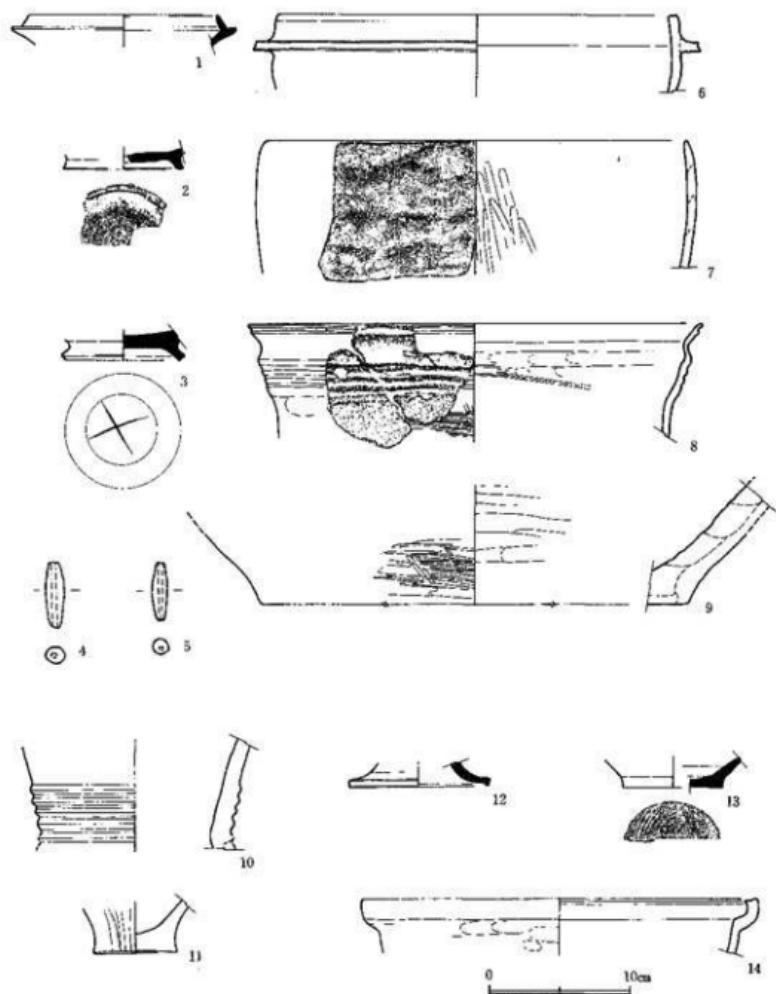
- 1 暗色粘質土(耕作土)
- 2 暗青灰色粘質土(鉄分沈着)
- 3 暗灰褐色粘質土
- 4 暗灰褐色粘質土(3より明)
- 5 暗灰色細砂シルト
- 6 暗灰色シルト(5より明)
- 7 暗灰色細砂シルト(5より明く、6より暗)
- 8 暗灰色粘質土(含む鉄分沈着)
- 9 暗灰色粘質土(やや青みかかる)
- 10 暗灰色粘質土(9よりやや明)
- 11 青灰色粘土
- 12 青灰色粘土(11よりやや暗)
- 13 青灰色粘質土(2よりやや暗)
- 14 黄褐色粘質土(鉄分沈着)
- 15 黄褐色粘質土
- 16 灰色砂(噴砂)
- 17 灰色砂

T 9

- 1 暗色粘質土(耕作土)
- 2 褐灰色粘質土
- 3 暗灰色粘質土と黄褐色粘質土の混合
- 4 喀斯特化色シルト
- 5 粘灰褐色シルト(4より暗)
- 6 粘灰色粘土
- 7 暗灰色土と灰褐色土の混合
- 8 粘灰色粘土(6より暗)
- 9 黑灰色粘土
- 10 暗灰色砂



第20図 山ヶ鼻遺跡第8、第9トレンチ平面・断面実測図



第21図 山ヶ鼻遺跡第1、第3、第5、第6、第9トレンチ出土遺物実測図

VII まとめ

1. 湖山第3遺跡

湖山第3遺跡における今回の調査では明確な遺構を検出することはできなかった。また、各トレーニングにおいてごくわずかな遺物が出土したが、いずれも搅乱土や埋立て埋土、耕作土等といった二次的影響を受けた、あるいは受けやすい上層からの出土で、明確な遺物包含層からの出土と考えることは困難であった。

以上の結果、調査面積が狭いため必ずしも全く遺跡がないとは言い難いものの、現段階では対象地区内に遺跡が存在する可能性は薄いものと考えられる。ただ、対象地区内は宅地造成や土砂採取等によってかなりの部分が削平あるいは搅乱を受けており、明確な遺構は検出されなかつたとは言うものの今後も注意を払っていく必要があることを付記しておきたい。

2. 秋里遺跡

秋里遺跡の今回の調査は、前述のとおり建物建設に際しての遺跡への影響範囲を知ることが目的であった。従って調査は対象地区内における本遺跡の最上位の遺構面あるいは遺物包含層を確認することに主眼をおいて実施した。その結果、既往の調査事例と照らし合わせると、中世のものと考えられる溝状遺構と奈良・平安時代から中世のものと考えられる遺物包含層を確認した。溝状遺構は、客土層も含めた現地表面下約80cm(旧耕作土上面下約45cm)で検出され、また遺物包含層は、現地表面下90~120cm(旧耕作土上面下60~80cm)で検出された。

以上の結果、調査面積が狭いため対象地区内がすべて同様とは一概に言えないものの、現地表面下60~70cm(旧耕作土上面下30~40cm)程度までであれば対象地区内における遺跡への影響は少ないものと思われる。

3. 八坂古墳群

八坂古墳群における今回の調査では、古墳の存在を示唆する遺構を数ヶ所で確認するとともに遺物の出土もあり、丘陵の尾根沿いに古墳が形成されていることが推察された。検出遺構は、明確なものとしては、3条の溝状遺構(S D-1, -3, -4)がある。いずれも断面形態や現地形から推して古墳の周溝である可能性が高い。S D-2については、検出状況から溝状遺構としたが、床面からの石の出土状況等を考え合わせると埋葬施設である可能性も考えられる。またS D-2とS D-3の間から不定形であったため平面図化はしていないものの、微妙な土色の変化を確認した。これについては、その上面から古墳時代の鉄斧、鉄製鍬先が出土していることと断面の形態を考え合わせると埋葬施設の可能性が高いと考えられる。なお明確な遺構は確認できなかつたものの、第3トレーニングの断面では古墳の盛土の可能性のある上層の変化を確認した。

以上の結果、対象地区内には2基ないし3基の墳墓が存在する可能性が極めて高いと考えられる。

4. 桂見遺跡

桂見遺跡における今回の調査では、総面積71m²という狭い面積にもかかわらず、多量の木製品と各時代の土器等が出土した。遺構は、第3トレンチで断面観察から落ち込みが検出されたのみであるが、遺物の出土状態は既往の調査事例と基本的には同様であると考えられ、本遺跡が縄文時代から中世にかけての大複合遺跡であることが再確認できた。以下、遺物包含層について若干の検討を加えながらまとめてみたい。

調査対象地区の最北西部に設定した第1トレンチからはごくわずかな遺物は出土したもの、耕作等の影響を受けやすい土層からの出土であったり、新しい時期の暗渠からの、しかもかなり摩耗した状況での出土であったため明確な遺物包含層からの出土とは考え難い。第2、第3トレンチからは縄文時代あるいは弥生時代から中世にかけての土器片や木製品が出土している。第2トレンチからの遺物の出土状況について見ると、各時代の遺物が混在する様相を呈しており、旧河川流路等の可能性も考えられる。第3トレンチについては、堆積層序にそったプライマリーな遺物包含状況となっている。また第4トレンチからは点数は少ないので、縄文時代から弥生時代にかけての土器片が出土している。このうち弥生土器については暗渠埋土からの出土ではあるが、本トレンチの南約20mで実施された本年度の発掘調査で同時期の遺構や多量の遺物も検出されており、本トレンチ周辺にもその疎・密の違いはあるものの明確な遺物包含層が存在するものと思われる。

なお上述のとおり、桂見遺跡のうち、本調査対象地区の南に隣接した地区での本年度発掘調査では各時代各種の遺物が出土し、特に木製品にはあまり類例のないものも認められるようであり、今後の調査への期待が今まで以上に広がったといえよう。

次に遺跡の範囲について若干触れておきたい。今回の調査は桂見遺跡の北部付近の試掘調査であった。調査の結果、第1トレンチでは遺構も明確な遺物包含層も検出されず、統く第2トレンチから明確な遺物包含層が検出されたため、北側の境界は両トレンチの間くらいに引くことができるのではなかろうか。ただ、今回の調査は狭い範囲の試掘調査である。従ってここで遺跡の範囲外とした地域についても本遺跡の北西部に位置する湖山池に湖底遺跡が眠っていることも考え合わせると今後も注意を払っていく必要があることを付記しておきたい。

5. 山ヶ鼻遺跡

山ヶ鼻遺跡における今回の調査は、当初、本調査対象地区の南に隣接する菖蒲遺跡の調査事例から、対象地区南部では遺構面の削平が行われている可能性が高いこと、また地区の古老から、同中央付近の微高地ある畑地では多量の客土がなされている可能性が高いこと、また同北部では以前の暗渠埋設の際に遺物が出土していること等を聞いていたため、それらを考慮しながら実施した。その結果、確かに上層が削平されていると考えられるものや客土が行われているものもあったが、第9トレンチを除く各トレンチから遺構を、また全てのトレンチから遺物包含層を検出した。これらの結果を大まとめにまとめるところと、3つの地域に大別することができる。

まず第1地域は、対象地区南部から中央部にかけての大井手川両岸の水田・畑地(T 1~5, 7)である。これらのトレンチの耕作土下は、いずれも上位の削平あるいは客土がなされており、その下から古墳時代から中世の時期のものと考えられる遺構面、遺物包含層が検出されている。なお、遺構面は1面しか検出してないものもあるが、遺物包含層の存在も考え合わせると、この地域には少なくとも上記の時期の2面の遺構面が存在する可能性があると考えられる。

第2地区は対象地区中央付近の微高地である大井手川左岸の畑地(T 6)である。当初客土によつて現況の微高地が形成されたものと考えていたが、調査の結果客土は認められず、耕作土下で遺物包含層と2面の遺構面を検出した。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土しており、遺構面と遺物包含層の状況からこの地域に縄文時代から中世にかけての少なくとも3面の遺構面が存在する可能性が高いと考えられる。

第3地域は対象地区北部の大井手川右岸の水田部(T 8, 9)である。調査の結果、両トレンチから弥生時代から中世にかけての遺物が出土し、第9トレンチからは明確な遺構は検出されなかったものの、総合的に判断すると同時期の2ないし3面の遺構面がこの地域に存在する可能性が高いと考えられる。

なお今回の調査地区内からは数ヶ所において噴砂ならびに砂脈が検出された。今後の調査によつてはこの地域の各時代と地表との関係が明確にできる可能性があり、期待されるところである。

〈主要参考文献〉

- (財)鳥取県教育文化財団『鳥取県教育文化財団調査報告書11 潟山第2遺跡発掘調査報告書』1982年
平勢隊郎・梶島吉則「『瀧山古墳群』とその環境」『鳥取大学教育学部研究報告』第37巻 第1号 1986年
鳥取県教育委員会・(財)鳥取県教育文化財団『鳥取県教育文化財団調査報告書24 潟山第1遺跡』1989年
(財)鳥取県教育文化財団『鳥取県教育文化財団調査報告書29 東桂見・布勢鶴指奥墳墓群』1992年
鳥取市教育委員会『鳥取市文化財報告書27 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』1990年
(財)鳥取県教育文化財団『鳥取県教育文化財団調査報告書25 秋里遺跡(西告竹)』1990年
鳥取市教育委員会『鳥取市文化財報告書1 久末・古郡家遺跡発掘調査報告書』1974年
鳥取市教育委員会『鳥取市文化財報告書Ⅲ 松原谷田遺跡Ⅱ・大路川遺跡調査概報』1976年
鳥取市遺跡調査団『広岡古墳群発掘調査概要報告書』1989年
鳥取市教育委員会『鳥取市文化財報告書V 桂見遺跡発掘調査報告書』1978年
(財)鳥取県教育文化財団『鳥取県教育文化財団調査報告書7 布勢遺跡発掘調査報告書』1981年
鳥取県教育委員会『東桂見遺跡試掘調査報告書』1992年
鳥取県庁『鳥取県郷土史』1932年
鳥取市『新修鳥取市史』第1巻 1983年
鳥取市遺跡調査団『鳥取市山ヶ森出土の遺物』『鳥取市の遺跡』1985年
(財)鳥取市教育福祉振興会『古海古墳群・菖蒲遺跡』1993年

図版 1



2. 同左 第2トレンチ（東から）



4. 同左 第3トレンチ西北壁断面（東から）



1. 湖山第3遠跡 第1トレンチ（東から）



3. 同上 第3トレンチ（西南西から）

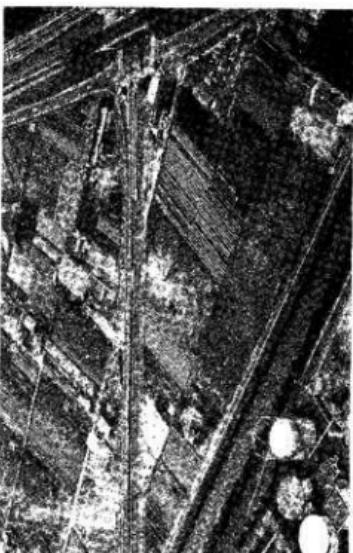
図版 2



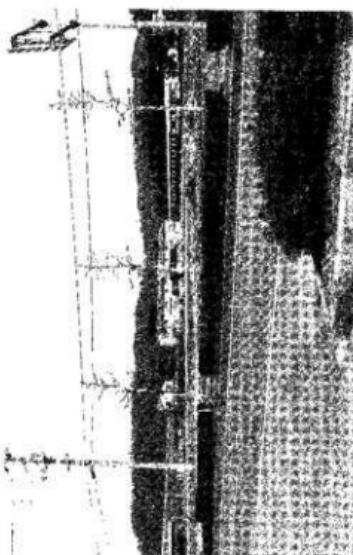
1. 湖山第3遺跡 第4トレンチ（東から）



2. 同左 第5トレンチ（西から）

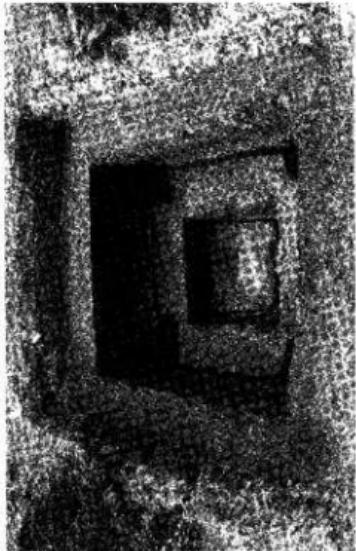


3. 秋里遺跡 調査地航空写真（上空東から）



4. 同左 調査地近景（南西から）

図版 3



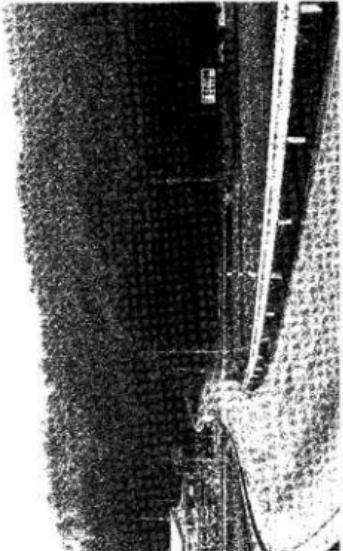
1. 秋里遺跡 第1トレンチ（西から）



2. 同左 第2トレンチ（北から）



4. 同左 第1トレンチ南西壁断面（東から）



3. 八坂古墳群 調査地遠景（北西北から）

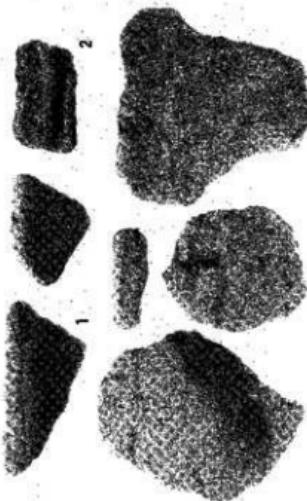
図版 4



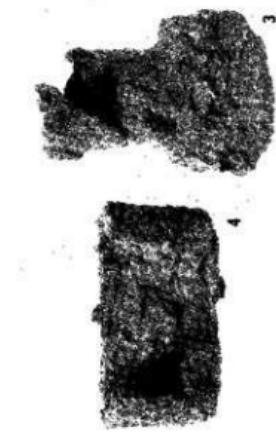
1. 八坂古墳群 第2トレンチ第3トレンチ南西壁断面（北から）



2. 同左 第3トレンチ南西壁断面（北から）



3. 同上 第2、第3トレンチ出土遺物



4. 同左 第2トレンチ出土鉄製品

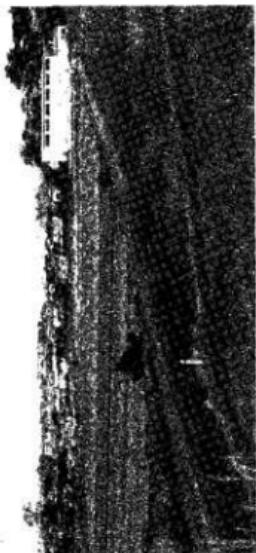
図版 5



2. 同左 調査地近景（南東から）



4. 同左 第2トレンチ南西壁断面（南東から）



1. 桂見遺跡 調査地遠景（南から）



3. 同上 第1トレンチ南西壁断面（南南東から）

図版 6



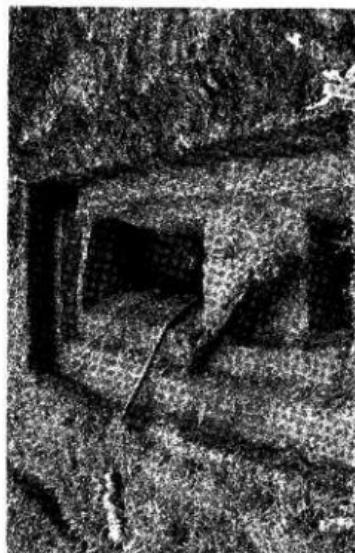
1. 桂見遺跡 第3トレンチ (南南西から)



2. 同上 第3トレンチ遺物出土状況 (南南東から)

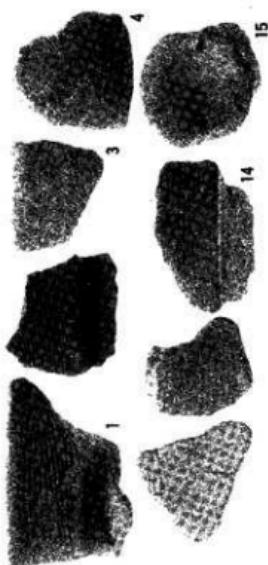


3. 同上 第3トレンチ遺物出土状況 (東北東から)

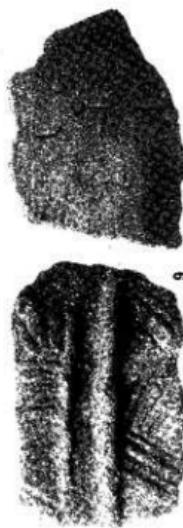


4. 同左 第4トレンチ (北北西から)

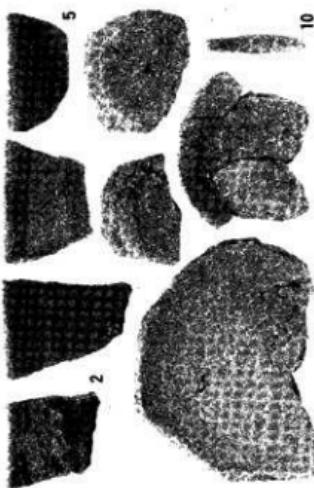
図版 7



1. 桂見遺跡 第3トレンチ出土遺物
2. 同左 第2、第3、第4トレンチ出土遺物



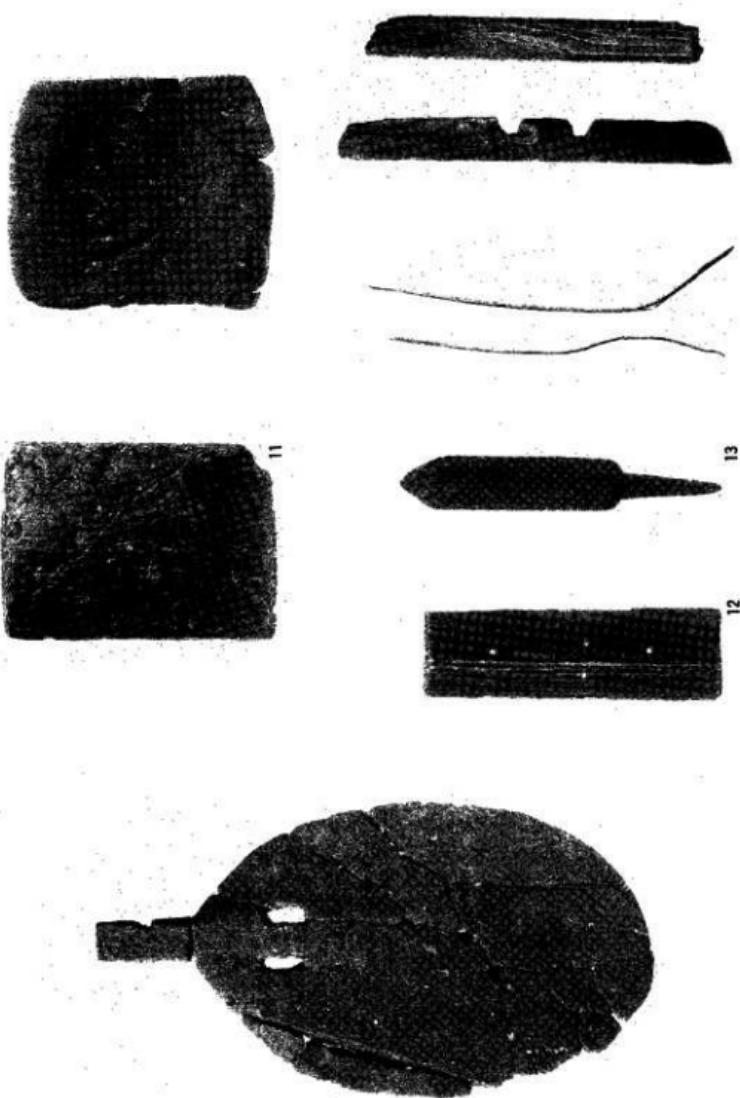
3. 同上 第2、第3トレンチ出土遺物



4. 同左 第2トレンチ出土遺物



図版 8



1. 桂見遺跡 第3トレンチ出土木製品

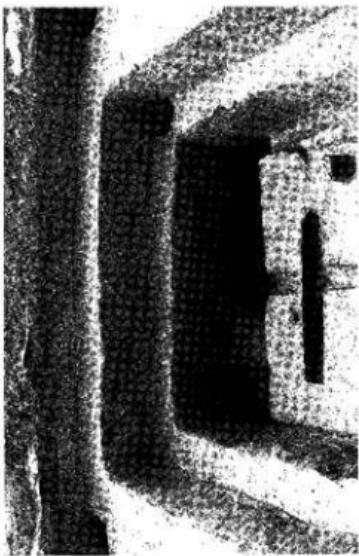
図版 9



1. 山ヶ峰遺跡 調査地遠景（北から）



2. 同左 調査地近景（南から）



3. 同上 第1トレンチ南壁断面（北から）



4. 同左 第2トレンチ（北から）

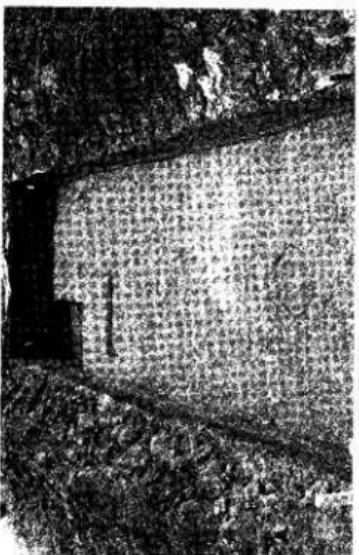
図版 10



1. 山ヶ鼻遺跡 第3トレンチ (北西から)



2. 同左 第4トレンチ (北から)



3. 同上 第5トレンチ (北から)



4. 同左 第5トレンチ北壁断面部分 (南から)

図版 11



2. 同左 第7トレンチ（東から）



4. 同左 第9トレンチ（南から）

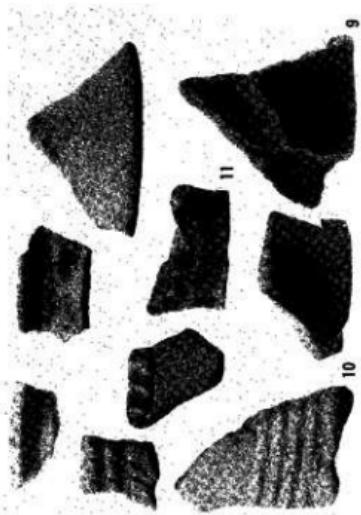


1. 山ヶ森遺跡 第6トレンチ（南から）



3. 同上 第8トレンチ（北から）

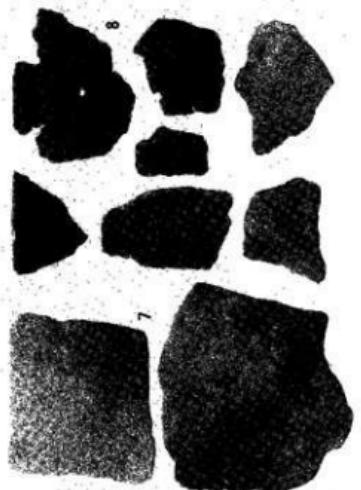
図版 12



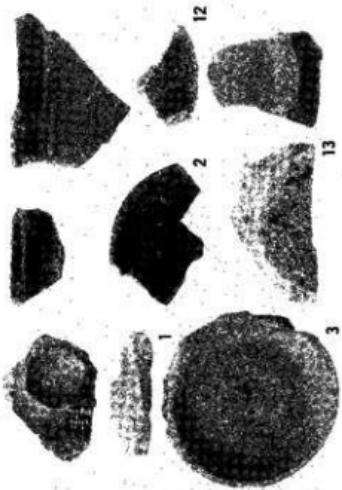
2. 同左 第6、第7、第8トレンチ出土遺物



4. 同左 第3、第5、第8トレンチ出土遺物



1. 山ヶ鼻遺跡 第6トレンチ出土遺物



3. 同上 第1、第3、第4、第5、第8トレンチ出土遺物

平成5年度
鳥取市内遺跡
発掘調査概要報告書

平成6年3月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会